

ニュースレター

NO. 21

2006.6.30.

名古屋大学大学院国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ (052) 789 - 4953

FAX (052) 789 - 4951

GSID ホームページ <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

新体制の実施に向けて

研究科長 西村 美彦



国立大学法人化後の中西前研究科長のもとで開始された博士前期課程（修士）のカリキュラム改革作業も終了し、平成18年度からいよいよ新カリキュラムが導入された。従来の基幹講座を3専攻11講座制から3専攻7講座制

に改組し、新たな枠組みとなった8専門教育プログラムによって2つのコースを運営していく体制が出発した。4月の入学式を終えて、新入生には現在のところ大きな混乱はなくスムーズに新しい体制へと移行している。この背景には緻密な計画と準備があったからであり、改めて国際開発研究科（GSID）の教員・職員の研究科に対する改善の意欲と行動力の底力を示すことが出来たと考える。

しかしながらGSIDを取り巻く研究・教育環境には依然厳しいものがある。法人化後の合理化のための処置はさらに厳しさを増し、大学全体の運営から各部局への予算配分の見直しは無論のこと、人員配置の見直しにまで至っている。大学側は納税者への説明責任、学生・保護者への説明責任のために評価をとり入れ、かつ予算の配分の指標に当てたいとしている。したがって、教員・職員にかかるこれらの作業負担は大きなものとなっていることは事実であり、それらが徒労に終わらないことを切に望みたい。導入された評価システムが、さらに伸びる、伸ばす分野、必要分野の強化につながるようになることを望む。また、これを機会にGSIDの教育・研究体制を見直したわけであり、新しい体制が軌道に乗るようにすることが当面の任務と考える。

GSIDが創設された当時の書類に目を通すと、「教科書に書いていない開発を学ぶ」というところが目に留まる。国際開発学としての体系は欧米の大学で形作られた経緯もあり、日本はこの分野の新参国であった。このような背景のもと、国立大学に国際開発学を専門とする大学院が設立

され、そのひとつがGSIDであった。名大の文系各学部と国連地域開発センターの関係者によってGSIDの原型が構想されたといえよう。新規の学際的な分野の組織は寄せ集め的で、特に日本のような縦割り社会であれば旧組織のサテライト的な講座としての集まりに過ぎないことが多い。しかしながらGSIDはバランスの取れた構成となり、また教授陣も国際開発の経験の第一人者ということで新しいタイプの大学院が創設できた。カリキュラムにも学際性を柱に海外実地研修（OFW）という独自の実習科目が開設され、これが現在も引き継がれている。新しい節目に当たる現在、果たして真に学際的で創造的な研究・教育体制が整ったのか問われるときでもある。すでに設立当時の教員も少なくなる中で、確実に教員の世代交代が行われている。新体制が単なる欧米の国際開発関係の大学に近づいた、キャッチアップしただけということで終わらないようにする事が次の任務であろう。

それでは何がそこにあるのだろうか。ミッション・ステートメントにも触れているように日本の経験、あるいはアジアの経験を理解し、開発途上国の実態とニーズに即した研究・実務活動を行う研究科としての独自性を打ち出し、それを強化すればよいのではないかと考える。欧米の大学では学べない、研究できない部分における研究・教育の積み重ねが重要ではないかと思う。単に調査研究のフィールドが日本、アジアにあるだけでなく、日本人、あるいはアジア人としての感覚、発想で捉えた開発学を蓄積している大学院ということでは希少価値が出るのではないかと考える。これは資料の蓄積だけでなく、人材の蓄積であり、この感覚、経験をもった教授陣、学生の存在である。この体制を作るために、長期的な計画を策定し、実行していく必要があるのではないかと考える。教科書にない開発を語り、学び、経験し、人類が進むべき本来の姿を開発の中で捉えていくことが必要であると考えます。

新カリキュラムの導入について

教務学生委員会

委員長 東村 岳史

かねてから研究科内で継続して議論してきたカリキュラム改革の最終案がようやく固まったのがほぼ1年前、そしてこの4月からいよいよ新カリキュラムとして正規の導入が実現しました。その概要は右表のように、①国際開発専攻と国際協力専攻が6つの専門教育プログラムからなる「国際開発協力コース」を、②国際コミュニケーション専攻が2つのプログラムからなる「国際コミュニケーションコース」を構成するというものです。またこのカリキュラム改革にともない、国際開発専攻と国際協力専攻は、それまでの基幹3講座から基幹1講座体制に変わりました（他研究科からの協力講座は以前からのまま）。

ここに至る経緯は、開発諸問題の潮流変化や超領域化に対応し、かつもともと実学指向の強い当研究科が、職業人・研究者の両方を養成する体制をいかに整えることができるか、試行錯誤や議論を重ねての道程でした。

基礎知識と専門知識の組み合わせを、新カリキュラムでは「T字型教育」としてうたっています。基礎を提供する研究科共通科目の中には、「国際開発入門」や昨年度から開始された「日本の開発経験」のように「国際開発協力コース」の必修科目で多くの学生に共通の知識・認識を持っていただく科目、あるいは当研究科の特色の一つである国内・海外実地研修といった科目が含まれます。そして各コース、またコース内の各プログラムは、それぞれ独自の科目編成によって専門性を追究するとともに、必要に応じて相互乗り入れする形で連携を保っています。

履修要件はコースとプログラムによって異なりますが、国際開発協力コースではどれか一つの専門プログラムを修了することが博士前期課程修了までの条件として定められました。以前は各専攻とも非常に緩やかな要件しか定められていなかったため、国際開発協力コースでは枠組みがしっかりしたものになったのと同時に、各プログラムに対する学生の帰属意識が強まるのではないかと考えられます。とはいえ、1期生の新学期の履修が始まったばかりの現在、彼／彼女らにどのような効果が現れるのか、いましばらく見届ける時間が必要です。2年後を楽しみに待ちたいと思います。

ただ一ついえるのは、以前のカリキュラムにおいても今回の新カリキュラムにおいても、履修の大枠は学生の指針になるとはいえ、それが個々人のニーズにどれだけ即したのものになるのかは、学生の主体性と教員のきめこまかな指導体制によるということです。修了要件を満たすのはも

ちろんですが、そこに何を加味していくのかは追究したいテーマによって異なってきます。多数の留学生を含めた構成員の多様性、また研究テーマの多様性は当研究科の特色であり、今回の新カリキュラム導入がその特色をさらに活かしていくものになることを願ってやみません。

新カリキュラム編成

国際開発協力コース	
国際開発専攻	国際協力専攻
<ul style="list-style-type: none"> ・「経済開発政策と開発マネジメント」プログラム ・「農村・地域開発マネジメント」プログラム ・「教育・人材開発」プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ガバナンスと法」プログラム ・「平和構築」プログラム ・「社会開発と文化」プログラム

国際コミュニケーションコース
国際コミュニケーション専攻
<ul style="list-style-type: none"> ・「人の移動と異文化理解」プログラム ・「言語教育と言語情報」プログラム

コースとプログラムのくわしい紹介はホームページをご覧ください。

http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/edu/new_edu_prgm/index.html

● 新入生向けガイダンスの様子 ●



◀ 国際開発専攻



国際協力専攻▶



◀ 国際コミュニケーション専攻

2005年度学位授与状況

2005年度に当研究科より授与された学位数は以下のとおりです。

論文博士取得者は1名、課程博士取得者は18名。課程博士取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻（DID）8名、国際協力専攻（DICOS）7名、国際コミュニケーション専攻（DICOM）3名です。

修士学位取得者は68名。修士学位取得者を専攻別に見ると、DIDが22名、DICOSが27名、DICOMが19名です。



国際協力専攻



国際開発専攻



国際コミュニケーション専攻

2006年度入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	(47)<30> 85	(21)<17> 34	(18)<15> 31
国際協力	(41)<24> 67	(20)<13> 34	(15)<13> 27
国際コミュニケーション	(24)<16> 37	(17)<9> 23	(17)<9> 23
合計	(112)<70> 189	(58)<39> 91	(50)<37> 81

注) ()は女性、< >は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	(6)<15> 15	(3)<9> 9	(3)<8> 8 《5》
国際協力	(9)<14> 17	(5)<10> 11	(5)<9> 10 《6》
国際コミュニケーション	(15)<8> 25	(6)<3> 13	(5)<3> 12 《7》
合計	(30)<37> 57	(14)<22> 33	(13)<20> 30 《18》

注) ()は女性、< >は留学生、《 》は進学者で内数

修了生の声



Sun Yat-Sen University, China
Associate Professor,

Dr. Li Meng

About the research topic and some suggestions for GSID students.

My dissertation is intended to provide a systematic treatment of food-economic issues which would emphasize the unifying structure of economic theory and mathematical methods involved in modern economic theory. The field has been progressed enormously in recent decades. Needless to say, economics is concerned with real world problems, and its development has been crucially dependent on a strong demand and stimulus from such problems. However, the large number of viewpoints based on diversified vested interests in a particular policy often obscures transparent theoretical understanding.

Hence, it is very important for us to find the basic logical structure of each problem and to be fully equipped with the major analytical tools. For above two purposes, it is

also necessary for those students of economics to intend on learning basic mathematical methods that become indispensable for a proper understanding of the current economic literature. It is always one of my views that not only econometrics is a practical subject, but also it can only be studied effectively if you undertake practical analysis of your own. Judgment and a methodical approach are essential ingredients for successful work. Meanwhile, I believe that firm belief, courage, hard work, patience, power of endurance and spirit of dedication are most vital for a person to be successful in his academic and non-academic work.

What was most difficult for you during the doctoral course?

For the reasoned consideration of empirical evidence from actual observed economic behavior, more importantly I must be in a position to appraise the drawbacks of currently analyzing methods and the difficulties posed by chosen method. No doubt initial phase is the most difficult. For many times I felt that it is impossible to finish it. But I finally overcame all difficulties through both hard-work and firm-brief originated from power of my family and my professor, who gave me understanding, courage and moral support. I will take this opportunity to express sincerest appreciation to my academic advisor, from the bottom of my heart, for whatever he did for me. It was a great honor for me to be his student.

Did you participate in any academic conferences in Japan?

I participated two academic conferences in Japan. I believe that it is very helpful for Ph.D. candidate students to take part in such academic meeting. By this way, they could receive many helpful comments and suggestions on their research findings which proved valuable in rewriting and in making publications.



富山大学 経済学部 経営法学科
専任講師 雨宮 洋美
hiromiam@eco.u-toyama.ac.jp

1. 授与式出席の喜び ～学生と祖母と私の卒業式～

私は2005年3月に博士論文を提出したので、修了式に出席したのは一年後の2006年3月でした。赴任先での授業準備の合間に博士論文をGSIDへと提出した後、学位記証明書のみを取り寄せたときにも、ただ忙しい中で事務的手続きのためという気持ちしかありませんでした。

そんなどたばたの最後を経て今年の3月にGSIDの修了式に出席しました。前日には富山大学で卒業生を送り出し、翌日は自分が式に出席するという状態でした。富山に帰ると今度は学生たちが「先生の卒業祝い」をしてくれたのでおもしろい状態です。赴任してから今年の3月まで忙しすぎ終わったことを振り返る時間が全くなかったので、学位記を研究科長から授与されたときには本当に嬉しかったのです。

修了式の翌日、この日を心待ちにしていた静岡県芝川町の祖母のもとに、学位記を見せにいきました。祖母は、昨年秋に体を悪くしなければ式に出席すると言っていたからです。兄弟姉妹が多いので若い頃に学業を断念したものの今でも読書や執筆が大好きな祖母は、いつも私を自分と重ねて見ていたようです。祖母は神棚に向かって私を座らせずっと泣きながら「よくやった」とただ純粹に褒めてくれました。ずっと中途半端だった気持ちが、式に出席し祖母に学位記を見せ喜んでもらったことで区切りが付きました。その日以来、祖母は家の外にまで自分で歩いていけるようになったそうで家族中で喜んでます。

今は博士論文執筆過程で苦しい皆さんも、それを乗り越えれば確実に違う気持ちになれると思います。

2. GSIDの魅力

博士論文を書き上げることができたのはGSIDの先生方、恵まれた研究施設、素晴らしい仲間のおかげだと思います。博士後期課程の学生には机や書棚の備えられた5-6人の小部屋が与えられ、夜も勉強しPCルームが使えることは本当にありがたいことでした。この環境設備は他の研究施設に誇れるものだと思います。

また、私は在籍しながら一時期JICAの準客員研究員をしており、その仕事の一環でタンザニア現地調査にも行きました。実務と結び付けながら研究ができるという自由さはGSIDの大きな魅力だと思います。

さらに、各自の発想での研究会や勉強会がたくさんありました。私も「開発と制度勉強会」として購読会をしており、法・経済・経営と多分野にまたがる友人たちとともにハイペースで何冊もの分厚い開発経済の書籍を読み意見交換を重ねたことはいい刺激となりました。彼らとはこれからもいい仲間であられると信じています。

自分のしたいことがクリアであれば、それを実務、勉強会等の形で実現し仲間とともに勉強する場を得られることは何よりもGSIDの魅力だと思います。このような自由な雰囲気、素敵な仲間のいる研究の場は他にはなく、恵まれた環境を与えられたことに感謝しています。以上のことは修了した今、皆さんにはっきりとお伝えできることです。

新スタッフ紹介



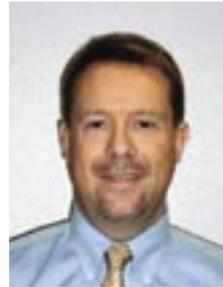
実地研修担当助手
鈴木 隆子

本年6月16日に実地研修担当助手として着任いたしました。海外実地研修 (OFW)、国内実地研修 (DFW)、プロジェクトサイクルマネジメント (PCM) コースの実施運営管理のお手伝いをさせていただきます。専門は教育開発で、博士前期課程をGSIDで修了し、その後博士後期課程をロンドン大学教育研究所に進み、JICA ザンビア事務所での勤務を経て、再びGSIDに戻ってきました。今回、大好きなGSIDに戻ることができて、大変嬉しく思っています。

もともとGSIDの学生なので、M1の時にOFW、DFW、PCMを履修しました。またFASIDのRRA/PRA実地研修にも参加しました。ですから、できるだけ参加学生の立場に立って、現地調査やPCMをより深く効果的に修得できるようにお手伝いをしたいと思っています。単位履修や課題の多さで時間確保が大変なことや、現地調査の全体像が見えにくいこと等、学生を取り巻く状況もある程度理解しているつもりなので、実りある研修になるよう側面支援ができるといいなと思います。

これまでJICA企画調査員、DFID研究プロジェクト研究員等において実務に携わりながら、教育開発、国際協力政策、社会調査に関わる研究活動を行ってきました。その中で66カ国を訪問し、インドネシア、タイ、ミャンマー、ベトナム、スリランカ、ネパール、ペルー、コロンビア、エチオピア、ザンビアの農村で数週間から2年間の実地調査を行ってきましたが、その調査法の基礎はOFW・DFWやFASIDの実地研修で学びました。OFWやDFWに参加していなかったら、その後の研究調査は実現しなかったと思います。研修の経験は、どの国のどんな関係機関とも堂々と交渉できるようにしてくれましたし、農村で調査するというのがどういうことなのかを教えてくださいました。指導教官の指導の下、調査の計画、枠組作り、調査の分担、データ整理、分析と、全体の流れが一通り経験できたことは有益でした。海外だけでなく、日本の農村の現状を学ぶ機会を得られたことも貴重でした。ですから、この機会に少しでも恩返しができればと思います。

今年はOFWでカンボジア、DFWで長野県泰阜村へ行きます。皆様と共に楽しみながら、実りある研修になればいいなと期待しています。裏方としては初めて参加することになるので、不慣れなところ、至らない点が多々あると思いますが、ベストを尽くしますので、どうぞよろしくお願ひします。



Writing Assistance
Research Associate
James Lassegard

Greetings to all GSID students, faculty, and staff!

I began work in February at GSID as research associate in charge of checking English documents, replacing Dr. Melisanda Berkowitz who is on maternity leave until next year. Prior to working here, I was a Doctoral student in the Graduate School of Education and Human Development. Hopefully, by the time you read this I will almost be finished rewriting my Ph.D. dissertation, which has been my major focus over these last few years.

I have long been interested in GSID because of its strong international focus and diverse student body. Actually, this graduate school has similarities to the program where I did my Masters at the University of Minnesota, called "Comparative International and Developmental Education." Currently, my main research interests lie in the areas of internationalization of higher education, and more specifically, intercultural learning and communication.

My recent research has involved the impact that international students have on Japanese universities in terms of internationalization and multiculturalism in the classroom. To this end, I think GSID may represent a model of internationalization which could have application for other universities. I would like to explore this topic at GSID while making constant efforts to improve the level of English writing and research.

Another aspiration of mine while working at Japanese universities is to increase dialogue within the university community, and between various disciplines. This is not an easy task, even in less vertical and hierarchical systems such as those in my home country of the United States. Nevertheless, I think there is great value in making efforts to learn about and comprehend what other academics are working on, in terms of both research and practice, in the building next door or even across the hallway. It seems to me that a truly international university or department recognizes the value of providing opportunities and an atmosphere in which everybody can participate in a dialogue about important issues facing the world.

Although my employment at GSID may be relatively short, I am looking forward to learning more about the unique education and research environment here as a result of this valuable work experience, and through various communications with students, faculty and staff. どうぞよろしくお願ひします。



「魅力ある大学院教育イニシアティブ」

特任講師 矢倉 研二郎

2006年1月にGSIDに特任講師として着任いたしました。

「特任」である私の任務は、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に関する仕事です。国からの助成を受けたこの「イニシアティブ」は、GSIDの海外ならびに国内の実地研修プログラムを強化することで「国際開発分野における自立的研究能力」を育成しようというものです。私が特に担当していますのは、過去の実地研修の報告書のデータベース化と事前研修等におけるテレビ会議システムの活用です。このほか「農村地域開発マネジメント特論」という科目を担当し、途上国の農家経済に関して講義をしております。

私の専門は農業経済学で、とくにカンボジアの農村経済について研究しています。(つい昨年までおりました)博士課程では延1年半にわたってカンボジア農村でフィールドワークを行い、農家の所得向上の制約は何か、近年見られる世帯間の経済格差拡大の原因は何かという問題に取り組みました。

長年に渡る内戦を経てカンボジアの経済は90年代以降回復してきましたが、依然として農村における貧困削減が最重要課題です。また近年では地方分権が推進されて農村開発行政の仕組みも変化しつつあります。こうした中でカンボジア農村経済に関する研究にはカンボジアの農村開発を進める上で重要な役割を果たすことが期待されます。しかし、内戦時代に現地調査をすることが困難だったこともあり、カンボジア農村経済に関する研究の蓄積はまだ非常に乏しく、さまざまな研究課題が手付かずで残されています。私はそうしたギャップを少しでも埋めるべく、今後もカンボジア農村を主たる研究対象としたいと思います。特に、これまでのように経済の表面的部分だけを見るのではなく、社会的・文化的・政治的要素が農村経済に与えている影響に注目し、カンボジア農村社会の個性を描き出すような研究をしていきたいと思っています。

農業経済学を専門としてはいますが、私の根本的な関心は「開発」や「貧困削減」にあります。ですからGSIDの一員となりましたことは私にとって願ってもないことです。残念ながら私の任期は「イニシアティブ」の終了する2007年3月までで、残された時間はもう1年もありませんが、精一杯努めて参りますのでどうぞよろしくお願いいたします。

院生活動紹介

就職セミナー

院生会就職作業部会代表

DICOS M2 朝日 智子

2006年1月20日に、本研究科と院生会の主催により「第2回就職セミナー：修了生・就職内定者に学ぶ就職活動のあり方」を開催いたしました。今回の就職セミナーでは、7月に行われた第1回就職セミナーで焦点をあてた、就職の「心構え」等の情報に加え、就職活動を間近に控えた学生を対象として、より具体的な「就職する」ための情報を提供しよう心がけました。今回のセミナーにも、他大学、他学部の学生や教授の方々を含めた多くの参加者にご来場いただき、就職に関する意識の高さと本セミナーに対する期待を実感いたしました。

講師には、JICA職員・専門家、開発コンサルタント、大学図書館職員として現在ご活躍されている本研究科の修了生4名をお招きするとともに、既に民間コンサルティング会社、国際交流基金から採用の内定を得ている3名の在校生にもご講演いただきました。第1部では、修了生の方から、1. 実際の業務内容、2. 業務において求められる知識やスキル、3. 就職活動を行う際のアドバイス等を、第2部では、在校生の方から、1. 内定に至った成功の要因、2. 就職活動における反省点、3. 就職活動と修士論文の同時進行に関するアドバイス等を中心にご講演いただき、それぞれの立場や経験に基づいた貴重なお話を伺うことができました。また、第3部では個別ブースでのオープンディスカッションを設定し、講演者と参加者一人一人が直接話をする中で、より深い、具体的かつ詳細な情報の共有を図ることができました。セミナー終了後に実施した参加者へのアンケート結果でも、「講演者の方々の経験に基づいた話を聞くことができ、今後の就職活動やキャリアプランを考える上で参考になった」という意見をいただき、たいへん好評でした。

今回のセミナーでは、教務学生委員の岡田亜弥教授と東



村岳史助教授に企画段階から何度も話し合いの場を設けていただき、当日の進行も行っていただきました。このようなご支援とご協力をいただけたことで、実現に至ることができました。

本セミナーを通じ、院生会が中心となって修士・M2・M1間における情報共有・交換の場を設定し、本研究科の縦のつながりを構築、強化する役割を果たすことができましたと思います。今後も、GSIDを中心とした人的ネットワークを広げ、相互に有益な知識や情報を共有していくことのできる環境づくりの継続に努め、学生の主体的な就職活動準備を支援していきたいと考えています。

スタッフの人事異動

【教員】

H18.3.31 退職

国際開発専攻教育開発講座 助手

三輪 千明 (浜松学院大学短期大学部 講師へ)

客員研究員の紹介

【国内客員研究員】

澤田 康幸 (東京大学大学院経済学研究科 助教授)

研究題目: Insurance against risk and poverty in developing countries

期 間: 平成18年4月～平成18年9月

佐藤 快信 (長崎ウエスレヤン大学現代社会学部 教授)

研究題目: 地域開発における人材育成の課題と方向性

期 間: 平成18年4月～平成18年9月

倉沢 愛子 (慶応義塾大学経済学部 教授)

研究題目: 開発と変容するインドネシアのイスラーム

期 間: 平成18年4月～平成18年6月

斎藤 文彦 (龍谷大学国際文化学部 教授)

研究題目: 地方ガバナンス改革による社会関係の動的変化に関する研究

期 間: 平成18年4月～平成18年6月

赤嶺 淳 (名古屋市立大学人文社会学部 助教授)

研究題目: 生物多様性と多文化共生——グローバル時代の地域環境主義

期 間: 平成18年7月～平成18年9月

小林 勉 (中央大学総合政策学部 助教授)

研究題目: 途上国におけるスポーツ振興政策

期 間: 平成18年7月～平成18年9月

長町 昭 (国際開発高等教育機構事業部 次長)

研究題目: 開発プロジェクトの管理運営手法研究について

期 間: 平成18年7月～平成18年9月

板倉 健 (名古屋市立大学大学院経済学研究科 専任講師)

研究題目: 応用一般均衡モデルによるアジアにおける経済連携協定の研究

期 間: 平成18年10月～平成19年3月

村田 俊雄 (国際協力機構 国際協力専門員)

研究題目: 中南米諸国における教育改革の動向に関する研究

期 間: 平成18年10月～平成19年3月

小泉 直 (愛知教育大学教育学部 教授)

研究題目: 英語語彙意味論・統語論

期 間: 平成18年10月～平成19年3月

河田 信 (名城大学経営学部 教授)

研究題目: トヨタ経営方式の他の企業・公共団体への適応可能性

期 間: 平成18年10月～平成18年12月

孫崎 享 (防衛大学校公共政策学科 教授)

研究題目: 同時多発テロ後の中東情勢と日本の危機管理

期 間: 平成18年10月～平成18年12月

ブイ チ トルン

(愛知淑徳大学大学院文化創造研究科 教授)

研究題目: 地域における多文化共生事業のあり方

期 間: 平成19年1月～平成19年3月

桐山 孝信 (大阪市立大学大学院法学研究科 教授)

研究題目: グローバリゼーションと国際機構の機能

期 間: 平成19年1月～平成19年3月

【外国人客員研究員】

Chhinh Sitha (王立プノンペン大学外国語学部 専任講師)

研究題目: カンボジアにおける農村調査手法の研究

期 間: 平成18年4月1日～平成18年8月26日

Mohamed Shariff Anees

(コロンボ大学政治学部 シニアレクチャー)

研究題目: スリランカの和平プロセスと今後の課題

期 間: 平成18年4月1日～平成18年7月31日

Le Cong Luyen Viet

(アジア開発銀行エコノミスト/研究コーディネーター)

研究題目: ベトナムにおける教育改革の政治経済学

期 間: 平成18年4月28日～平成18年9月17日

S. Anandhi (マドラス開発学研究所 助教授)

研究題目: インドにおけるジェンダー—歴史と現在—

期 間: 平成18年8月1日～平成18年11月30日

出版物紹介

2005年度には『国際開発研究フォーラム』30号、31号が発行されました。また、写真のように装丁を一新しました。



『国際開発研究フォーラム 30』

2005年9月13日発行

〈目次〉

Labor Productivity and Inter-Sectoral Reallocation of Labor in Singapore (1965-2002) K. Ali AKKEMIK

Hedonic Valuation of Marginal Willingness to Pay for Air Quality in Metropolitan Damascus ALSHERFAWI ALJAZAERLI Moaz

Regional Disparity and Structural Change in Economic Growth: An Empirical Evidence of the Convergence Hypothesis in China Case Chi AN

中国における独占禁止法・政策に関する考察—行政独占規制を中心として— 戴 龍

The Present State of Small-scale Enterprises in the Philippines under the Framework of the National SME Development Agenda: A Case Study in Zamboanga City Jose D. ELVINIA

The Double Dividend of More Equally Distributed FDI: Analyzing regional variation in the FDI-growth nexus across Chinese cities Ulrich REUTER

スウェーデン開発協力政策の理念と評価システム—ベトナム法整備支援の事例 砂原 美香

社会的組織化のアクチュアリティ—「制度のエスノグラフィ Institutional Ethnography」における日常世界の探求— 瀧 則子

Reforming Cambodian Local Administration: Is Institutional History Unreceptive for Decentralization? PRUM Virak

中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克—中国朝鮮族学校における教育課程に着目して— 尹 貞姫

『国際開発研究フォーラム 31』

2006年2月28日発行

〈目次〉

BTCパイプラインがもたらす南コーカサス地域への政治・経済的影響 廣瀬 陽子

Implementation of Environmental Policies in Yokkaichi: What are the Lessons to the Development Literature? Jose Antonio Puppim de Oliveira

FDI-Growth Nexus in Vietnam Le Viet ANH

The Impact of ADR Shalish towards Improving the Status of Poor Women: Reformed Shalish and NGO-Based Mediation in Bangladesh BEGUM Shamshad

Convergence of Lao Human Resource Management: Lessons from Four Firms DUANGTAVANH Sunnti

高度経済成長期における生産要素の地域配分と地域経済への影響—1部門地域リンク CGE モデルによる計量分析— 片岡 光彦

異文化との接触における食の変容—中国東北部朝鮮族の食文化を事例として— 李 恩郷

Potential Issues in Food Reform Process and Impacts of Policy Options: The Case of China LI Meng

Indonesian Tax Administration Reform: a paradigm shift to good governance practices Yond RIZAL

日本人とロシア人の行動パターンについての考察—ロシアの三地域（極東・シベリア・中部）におけるイメージを中心として— ロシエコワ オリガ

International Evidence on the Role of Financial Sector in Stable Economic Development Farkhanda SHAMIM

1930年前後日本における〈シャンハイ・イメージ〉—『犯罪科学』および『犯罪公論』にみる事例研究— 徐 青

21号以降の『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記 URL アドレスより全文閲覧可能となっております。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>

お知らせ

オープンキャンパス 2006

皆様のご来場をお待ちしております。

日時：7月14日(金) 13:00-16:30

会場：名古屋大学大学院 国際開発研究科棟
地下鉄名城線「名古屋大学」下車

内容：

- (1) 留学生相談、施設見学 13:00-14:00
見学できる施設：図書室、言語情報処理室（コンピュータルーム）
- (2) 全体説明会 14:00-14:50
専攻及び新教育カリキュラムの特徴
GSIDの入学生の構成、就職先
入学試験の説明
院生による特色ある社会貢献活動
GSIDでの学生生活（院生会）など
- (3) 専攻別説明会と個別相談 15:00-16:00
各専攻別説明会（教育プログラムを中心に）
個別相談（教員と院生が対応します。）
- (4) 展示 11:00-16:30
海外実地研修、国内実地研修について
研究科出版物
- (5) 海外・国内実地研修スライドショー 13:00-13:50

お問い合わせ先： opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp

ホームページ： <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/fkawa/opencampus.htm>